明解法華経要義

講述 大僧正 本多日生上人

明解
法華経要義

現代語訳／編集
土屋 信裕

明解「法華経要義」

講述　大僧正　本多日生
編集　土屋信裕

平成二十五年四月二十八日御正当

日什大正師御生誕七百年慶讃

《記念出版》

本書は昭和四年六月に東京の中央出版から刊行された『法華経要義』を現代語に改めたものである。　編　者

近代の教傑 本多日生（にっしょう）上人

慶応三年姫路藩士国友堅次郎の二男として生まれ、菩提寺の本多日鏡の嗣子となる。哲学館（後の東洋大学）に学ぶ。宗門の積弊不振を嘆き、二十四歳教務部長となり教学布教に振るうも、宗門内の怨恨をかって、突如剥牒処分となる。正義貫徹のため、顕本法華宗義弘通所を各地に開設し東奔西走す。各宗協会から師を宗門に復帰させよとの声起こり、僧籍に復し妙満寺派綱要を編す。顕本法華宗と宗名を改す。仏教界の退廃と日蓮門下の分裂を憂い、各教団有志を募って統一団を結成。後、各界の名士からなる天晴会、その他講妙会、婦人のための地明会、労務者のための自慶会等を創す。日蓮聖人の唱える本仏・釈尊中心の仏教と、人生に勇気と慈悲を以て歩む信仰の感激を全国に展開し活躍す。明治から昭和期にわたる日蓮門下の偉大な存在である。

昭和六年、六十五歳寂

序

人類の宗教文化史上、「法華経」ほど、時空を超えて読み継がれた経典は希である。そして時と処において根付き、如何なる人々にも心を癒し、救済を果たしてきた聖書である。本書の編者は、現役のパイロットである。Ｆ４戦闘機の操縦士を経て、現在民間航空の機長の要職にあり、多くの人の生命を預かり、時々刻々に襲い来る自然の猛威を操りながら、心身を生死の間に置いている。初め私は、土屋師が法華の坊さんで、しかもパイロットだという、このアンバランスに驚いた。だが土屋師の祖父にあたられる土屋日宏猊下は、顕本法華宗管長であり総本山妙満寺の貫首であられたことを想起すると、編者土屋師が生粋の法華の坊さんであることに何の不思議はない。

編者は法華修行の範を本多日生師に求められたようである。本多猊下は、明治大正昭和に跨がり、仏教界のみならず日本の思想界をも統率した英傑であった。今日、世界的企業となったトヨタの創始者豊田佐吉翁も、同年であったことも手伝い、本多猊下より多くの薫陶を受けた一人であった。

今、平成の時代にあって、本多猊下を模範とする傑僧出で来たりなば、本宗は言うに及ばず日本、アジア、果ては全世界に妙法の種子は蒔かれるであろう。妙法の種子は「我此土安穏」（我が此の土は安穏なり）の華を開くこと必定である。土屋師の顔を思い出すと私の心は躍る。師よ、期待を裏切ることなかれ。

平成二十四年　五月十六日

元東洋大学教授　文学博士
元日蓮宗　勧学職
顕本法華宗　布教総監
河村　孝照

妙法蓮華経　目次

序　品　第一……八
方便品　第二……一九
譬喩品　第三……五〇
信解品　第四……六二
薬草喩品　第五……七四
授記品　第六……八八
化城喩品　第七……九四
五百弟子受記品　第八……一〇七
授学無学人記品　第九……一一九
法師品　第十……一二一
見宝塔品　第十一……一四五
提婆達多品　第十二……一五五
勧持品　第十三……一六七

安楽行品　第十四……一七八
従地涌出品　第十五……一九二
如来寿量品　第十六……二〇八
分別功徳品　第十七……二八八
随喜功徳品　第十八……三〇三
法師功徳品　第十九……三〇八
常不軽菩薩品　第二十……三一三
如来神力品　第二十一……三二〇
嘱累品　第二十二……三三八
薬王菩薩本事品　第二十三……三四四
妙音菩薩品　第二十四……三五八
観世音菩薩普門品　第二十五……三六三
陀羅尼品　第二十六……三六八
妙荘厳王本事品　第二十七……三七三
普賢菩薩勧発品　第二十八……三八五

序品第一

（現代語）

その時に、世尊は僧侶・尼僧・信士・信女に囲まれ、敬い讃えられて、「無量の意義」と名付けられる、菩薩を教える法、仏の護念する所を説かれました。そして、仏はこの経を説き終わると結跏趺坐し、無量義処三昧という瞑想に入られて身も心も動かさなかったのです。

（要文）

爾の時に、世尊、四衆に囲繞せられ、供養・恭敬・尊重・讃歎せられて、諸の菩薩のために、大乗経の無量義・教菩薩法・仏所護念と名くるを説きたもう。仏此の経を説き已って、結跏趺坐し無量義処三昧に入って、身心動じたまわず。

（要義）

序というのは、これから説こうとする経の内容をおおよそ察知させるものです。そして、法華

経の序品は、仏が世に出でた最高の目的、所謂出世の本懐、出世の真実を語らんとすることを表しています。したがって、ある人のために説いたとか、ある出来事について説いたというような内容ではないが故に、この法華経の法座には、聴衆の代表となるべき総ての者が列座して釈迦牟尼仏を囲繞し、そして天よりは華が降り、虚空には音楽が奏でられるという光景が演出されます。その美しき光景は、法華経の理想を現したものと言えましょう。また、煩悩を断つというような個人的な修行を主にするが故に、他の大乗経典においては仏にはなれないと差別されていた声聞・縁覚（小乗とされる二乗）を、この法華経では利他の活動をする菩薩と等しく対告衆にします。これは法華経が、一切の仏道にある者に説かれる大事な教えであるからです。

「結跏趺坐」とは心を落ち着けて静かに坐ることであり、「三昧」とは専念するということであって、精神の統一を図って雑念を混じらないようにすることです。そして、身も心も動じることのない安静なる状態で、精神を集中専念されていることは、「無量義」という、一元の大原理とその原理より発現するところの万象の関係です。それは、宇宙の実相について言えば、本体と現象の関係、教えについて言えば、完全なる統一の妙法とそれを説き広げた千差万別の教義の関係です。この無量義処三昧を経て、法華経の統一の妙法は説き出されます。如何なる時代であっても、如何

なる国家に於いても、真理を研究する者、思想を研究する者は、まずはどのように纏まりがつくかということを考えなければなりません。幾ら学問をして色々なことを学んだとしても、切れ切れの思想を相闘わしている限りは、一向に混乱より抜け出すことは出来ません。論語を読めば論語のような、法華経を読めば法華経のような、西洋の哲学書を読めばそのような気になって、一向に纏まりがつかないようでは全く未熟なことと言えます。種々なる思想によく纏まりをつけて統一大成しようとすること、眉間より光を放つ如く真実を開顕せんと臨むことは、個人の理想実現のためにも、社会の理想実現のために於いても大変重要なことです。そのためには、この無量義経より法華経に移っていく状態を、総てに於いて身に体現して行くことが大切な事となります。

（現代語）

その時に、世尊は眉間の白毫相より光を放ち、東方一万八千の世界を行き渡らざるところなく照らされたのです。

（要文）

爾の時に佛眉間白毫相の光を放って、東方萬八千の世界を照らしたもうに周徧せざることなし。

（要義）

釈迦牟尼仏が眉間の白毫から光を放ったことにより、東方一万八千の地獄から天上界まで六道の世界のすべてが照らし出されます。順序を追って物事を説こうとすれば長くなりますが、照らせば一時、私達は照らした中に総ての事柄を見ることが出来る、照らすという光景は物を統一大観するということを現しているのです。所謂「達人は大観す」と言うように、光を以て全体を照らせば見えない所は無い、高い所に上がって町全体を見れば、何処に家があってどういう有様になっているという総てを一遍に見ることが出来る訳です。これは即ち、真理もまた説こうとすれば長いものであるけれども、照らせば一時に現れるということを示しています。そして、この光に照らされた実相、仏の光明によって照らされた有様を、皆は見ることが出来たけれども、その意味合いについて仏が語られることを聞こうとする所に法華経が起こって来るのです。

仏教が教えである以上は、その照らしたる事実を説き出さねばなりません。そして、所謂「理教不二」と言って、真理と教えとが二ならず、説き出された教えと照らしたる事実とが合致しているものが善き教えとなります。語らなければ宗教は生じないのですから、禅宗のように教えを説く経典を蔑視して「事実は事実だ」と黙って見ているというのならば宗教は成り立ちません。「教外別伝、不立文字」と「言葉である教えと真理は別だ」というならば、「その別だという真理は何か」ということになります。そのようなことは贅論であって、真理というものはやはり教えを以て語らなければ分からないものです。次の方便品には「仏と仏のみ乃し能く諸法の実相を究尽したまへり」とありますけれども、真理を知り尽くした仏同士が肯き合うことはあっても、判ってない者達が判ったようなつもりになって肯き合っているようでは愚にも付きません。一方に仏という真理を照らし出している存在があり、一方に判ってはおらぬ無明の衆生があるからこそ、そこに教えが起こるのです。

（現代語）

仏の子、文殊よ、できれば何事が起きているのか、人々の疑いを解きたまえ。人々は皆喜び、そして君及び私を仰ぎ見ている。世尊は何故に、この光を放たれるのであろうか。仏の子よ、どうか

疑いに答えて彼らを喜ばしたまえ。何の衆生を利益する所があって、このような光を放たれるのであろうか。

文殊菩薩は、答えました。私は、量り知れぬほどの過去の世に、このようなめでたき出来事があったことを憶えている。推し量るに、今日、如来も当に「妙法蓮華」、菩薩を教える法、仏の護れるものを説かれるのであろう。

（要文）

仏子文殊、願わくは衆の疑を決したまへ。四衆欣仰して、仁及び我を瞻る。世尊、何が故ぞ、この光明を放ちたもう。仏子よ、時に答えて疑を決して喜ばしたまえ。何の饒益する所あってか、斯の光明を演べたもう。

今此の瑞を見るに、本と異なることなし。是の故に惟忖するに、今日の如来も当に大乗経の妙法蓮華・教菩薩法・仏所護念と名くるを説きたもうべし。

編者　土屋信裕（しんゆう）略歴

東京染井・法林山蓮華寺昭和三十六年出生。顕本法華宗管長、故土屋日宏を祖父。三十五歳で顕本法華宗の教師となる。航空自衛隊Ｆ４戦闘機幹部操縦士、大手商社を経て、ＡＮＡの機長として国際線・国内線を飛行する傍ら、宗派を超えて日本各地で講演を行う他、アジアの仏教界と協賛して行う「妙法の行進」を五年間に亘って同志と共に推進した。インド・カンボジアの現地僧侶延べ四千人を動員し、二万冊の本多日生師選出の要約「妙法蓮華経」（現地語訳）を作成配布。現在、欧米などに布教の拠点を開設している。

顕本法華宗布教師・教学研究所員歴任

「法華行者の会」主宰 http://www.kempon.net/

明解「法華経要義」

講述　大僧正　本多日生
編集　　土屋信裕

発行日　昭和四年　原本発行
　　平成二十五年二月二十八日　初版発行

発行者　法華行者の会
〒八一八-〇〇三五 福岡県筑紫野市美しが丘北三-一〇-二
電話　（〇九二）九二六　八〇三一

発行所　櫂歌書房
〒八一一-一三六五 福岡県福岡市南区皿山四-一四-二
電話　（〇九二）五一一　八一一一

発売所　㈱星雲社
〒一一二-〇〇一二 東京都文京区大塚三-二一-一〇

出版助成　本多日生記念財団